

拡張コピュラ構文の意味分析  
(Semantics of the Extended Copular Construction)

益岡隆志 (神戸市外国語大学/国立国語研究所客員)

1. はじめに

日本語の「拡張コピュラ構文」(ノダ構文)の研究

日本語研究の内部で精緻な研究が進められているが、これまで益岡 (1990 (1991)、2003 (2007)) を含め、個別言語の個別現象として扱われてきた傾向が強い。

本発表の目標

日本語の「拡張コピュラ構文」(ノダ構文)の意味を「コト拡張」(母型からの拡張)の観点から分析するとともに、他言語の類似構文への適用を考えること

2. 拡張コピュラ構文としてのノダ構文

2. 1 コト拡張とノダ構文

「コト拡張」とは所与の構文(母型)のなかのモノ(名詞句)をコト(述語句)に置き換える構造的拡張のことである(益岡 (2013))。その事例にノダ構文がある。ノダ構文では、名詞述語構文(コピュラ構文)がモノ(名詞句)からコト(述語句)への置き換えにより拡張される。

- (1) [X(モノ)ハY(モノ)ダ] (母型) ⇒ [X(コト)ハY(コト)[ノ]ダ] (拡張構文)
- (2) あれはお祭りだ。
- (3) あれはお祭りで騒いでいるのだ。

コピュラ構文からノダ構文への拡張に対応して、モノ X とモノ Y の結びつきからコト X とコト Y の結びつきへと移行する。

- (4) パスカルにとって考えるということは、勝つか負けるかということであった。(小林秀雄「作家の顔」)
- (5) 消費税が上がるということは生活が苦しくなるということだ。
- (6) 受験で東京や仙台に行って、雪がないのに驚いた。雪がないのを見て驚くということは、冬に雪のない光景にじかに接するまで、自分の中では「冬は雪がある」というイメージしかなかったということだ。(井上優「相席で黙ってられるか」)
- (4') (パスカルにとって考えるということは) 勝つか負けるかなのだ。
- (5') (消費税が上がるということは) 生活が苦しくなるのだ。
- (6') (雪がないのを見て驚くということは、) 冬に雪のない光景にじかに接するまで、自分の中では「冬は雪がある」というイメージしかなかったのだ。

## 2. 2 本発表の検討課題

### 2. 2. 1 構成的意味と派生的意味

構文における2つの意味

#### (i) 構文の構成に対応する「構成的意味」

コト拡張がかかわる場合、拡張された構文の構成的意味は元になる構文(母型)の構成的意味に還元することができる。

#### (ii) 構文のレベルで意味拡張により派生する意味(「派生的意味」)

構文の派生的意味は構文の構成に直接対応しないところから、母型の意味に還元することはできない。

ノダ構文の場合

(i) 構成的意味：母型であるコピュラ構文の構成的意味に還元可能

(ii) 派生的意味：コピュラ構文の構成的意味に還元できない、構文レベルに特有の意味

益岡 (2003 (2007))

コト拡張の見方のもとに、ノダ構文の意味は母型であるコピュラ構文の構成的意味に還元できるとした。この考え方によれば、ノダ構文の意味(意味用法)を代表する(7)・(8)のような「主題明示・措定」と名づけた意味(意味用法)は、コピュラ構文の「主題明示・措定」と名づけた意味(意味用法)―例えば(9)―に対応するということになる。(cf. 指定の意味用法)

(7) 杉山はしだいに卓治がくるのを煩わしく感じるようになった。そう思うのは彼が疎ましくなったのである。(松本清張「断碑」)

(8) ローサは、彼と同じマドリッド大学の法学部出身。それだけでなく、結婚して子供を育てながら心理学をやり直し、今は大学の助手を勤めている。つまりローサは、プロの主婦であり、母親であり、そして心理学者なのだ。(小西章子「スペイン子連れ留学」)

(9) 日本は山国だ。

### 2. 2. 2 ノダ構文の構成的意味

ノダ構文(「主題明示・措定」の場合)の構成的意味―すなわち、母型(コピュラ構文)の構成的意味に還元可能な意味―をここでは次のように考える。

[XハYデアル=XハYナリ (ニアリ)]

コピュラ構文におけるモノXとモノYの関係の場合は、XがYというカテゴリーに位置する(所属する)という「カテゴリー所属」の意味を表すが(cf. 指定の意味用法の取り扱い)、ノダ構文におけるコトXとコトYの関係の場合は、Yが「の」というカテゴリー無指定の要素であるため、カテゴリー所属の意味は成立せず、XがYに“密接に関係する”という「近接性」(近接関係)の意味を表すにとどまる(cf. 池上(1981))。(cf. 西山(2003)の「同一性文」)

近接性のデフォルトとしての意味は、対象であるコトXをコトYで捉えなおす(言い換える)という換言の意味である。

(4) パスカルにとって考えるということは、勝つか負けるかということであった。(小林秀雄「作家の顔」)

この場合、「考える」ということを「勝つか負けるか」ということで捉えなおしている。(4)に対応するノダ構文(4')の意味は、そのような換言の意味として理解される。

(4') (パスカルにとって考えるということは) 勝つか負けるかなのだ。

## 2. 2. 3 検討すべき課題

「主題明示・措定」の意味には「事情説明(原因理由説明)」(例(7))と「帰結説明」(例(8))がかかわるが、「事情説明」・「帰結説明」の意味は、「換言」というだけでは説明が不十分であり、「事情説明」・「帰結説明」の意味が生じる理由を考える必要がある。この問題を次の3で考察する。

(7) 杉山はしだいに卓治がくるのを煩わしく感じるようになった。そう思うのは彼が疎ましくなったのである。(松本清張「断碑」)

(8) ローサは、彼と同じマドリード大学の法学部出身。それだけでなく、結婚して子供を育てながら心理学をやり直し、今は大学の助手を勤めている。つまりローサは、プロの主婦であり、母親であり、そして心理学者なのだ。(小西章子「スペイン子連れ留学」)

## 3. 派生的意味としての事情説明・帰結説明

### 3. 1 因果性の意味の派生

構成的意味として理解される近接性(近接関係)から因果性(因果関係)の意味が派生する。

(5) 消費税が上がるということは生活が苦しくなるということだ。

(消費税が上がると、生活が苦しくなる)

(6) 雪がないのを見て驚くということは、冬に雪のない光景にじかに接するまで、自分の中では「冬は雪がある」というイメージしかなかったということだ。

(「冬は雪がある」というイメージしかなかったために、雪がないのを見て驚く)

(5') (消費税が上がるということは) 生活が苦しくなるのだ。

(6') (雪がないのを見て驚くということは) 冬に雪のない光景にじかに接するまで、自分の中では「冬は雪がある」というイメージしかなかったのだ。

### 3. 2 事情説明・帰結説明の意味の派生

#### 3. 2. 1 因果関係の方向性

「XトイウコトハYトイウコトダ」(「Xトイウコトハ Yノダ」)における因果関係の方向性として、「X(ダ)カラY」というタイプと「Y(ダ)カラX」というタイプの2つが考えられる(cf. 奥田(1990)、田窪(2006)、木下(2013))。

そのうちの「X(ダ)カラY」が帰結説明に当たり、「Y(ダ)カラX」が事情説明に当たる。

(5') (消費税が上がるということは) 生活が苦しくなるのだ。[帰結説明]

(消費税が上がると、生活が苦しくなる)

(6') (雪がないのを見て驚くということは) 冬に雪のない光景にじかに接するまで、自分の中

では「冬は雪がある」というイメージしかなかったのだ。[事情説明]

(「冬は雪がある」というイメージしかなかったために、雪がないのを見て驚く)

#### 事情説明の場合

「Y(ダ)カラX」という因果関係であるところから、コトYとコトXのあいだに原因理由と結果の関係が成り立つ。

- (7) 杉山はしだいに卓治がくるのを煩わしく感じるようになった。そう思うのは彼が疎ましくなったのである。(松本清張「断碑」)
- (10) いつものようにコロンビア大学に行ったキーンさんだったが、いつまでたっても角田先生には会うことができなかった。開戦と同時に角田先生は敵性外国人として勾留されてしまったのである。(週刊朝日編集部編「司馬遼太郎からの手紙」)

#### 帰結説明の場合

「X(ダ)カラY」という因果関係であるところから、Xを理由(根拠)としてYという帰結を導き出すこと—すなわち、推論に基づく帰結説明—が考えられる。

- (8) ローサは、彼と同じマドリード大学の法学部出身。それだけでなく、結婚して子供を育てながら心理学をやり直し、今は大学の助手を勤めている。つまりローサは、プロの主婦であり、母親であり、そして心理学者なのだ。(小西章子「スペイン子連れ留学」)
- (11) 仕事先の人に出身地を聞かれて「実家は芦屋です」と答えると、決まって相手からは「じゃあ、お嬢さんなんだ」という判でついたようなレスポンスがあるとこぼしていた。(大人の街歩き編集部「大人の神戸」)

### 3. 2. 2 事情説明・帰結説明の卓越性

複合接続詞「トイウノハ」(「トイウノモ」)・「トイウコトハ」の形成

「トイウノハ」(「トイウノモ」): 事情説明に用いられる

- (12) 卒論指導教授に「君は物書きになるといい」と言われました。それを聞いてずいぶん驚きました。というのは自分が物書きになるかもしれないなんて、当時は考えたこともなかったから。(村上春樹「夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです」)
- (13) こういう正確な報告書に、私は教えられる点大であるが、しかし、はたして考古学は、これでいいのであろうかという疑問に、いつもとられる。というのは、そこに人間についての理解が欠如しているばかりか、欠如しているという意識すら、まったく欠如しているのである。(梅原猛「黄泉の王」)

cf. 「X トイウノハ」

- (14) このときの対馬への旅行は、その後「青春紀行 対馬」の題で書き、それを随筆集『考えたり怒ったり』に収めた。自分でいうのはおかしいが、好きな文章である。好きな文章というのは、青春時代といってもよい大学生の総括の意味がこめられているからである。(森浩一「わが青春の考古学」)

「トイウコトハ」：帰結説明に用いられる

- (15) 犯人当てゲームのためには、伏線としてバラまかれたデータをまとめて、合理的な筋をおせば、真犯人が当たるはずだということまで、読者にデータを公開しなければならない。ところが、この『ゼロの焦点』の場合、どこで区切れればいいのか、なかなか見当がつけにくい。ということは、全体として犯人当てのための確たるデータがたいへん乏しい、ということでもある。(平野謙『『ゼロの焦点』解説』)
- (16) 蒲生野は広い、北は安土から南は水口のあたりまで、西は鏡山から日野のはずれに及び、湖東・湖南の平野の大部分を占めている。ということは、つまりはっきりしないのであって、まして薬狩がどこで行われたか知る由もない。(白洲正子「近江山河抄」)

cf. 話者の交替

- (11') 「実家は芦屋です」「ということは、お嬢さんなんだ」

#### 4. ノダ構文とワケダ構文における因果性

##### 4. 1 ワケダ構文による帰結説明

帰結説明はワケダ構文によっても表される。

- (17) お金を払って製材屑を引き取ってもらい、他方で電力を買っていた今までのやり方を、自分で木くずを燃やすことで発電するのに切り替えたということは、結局自社内で木くずを電力に物々交換したわけだ。(藻谷浩介「里山資本主義」)
- (18) 数学者は、生涯、ひとつの分野で定理の証明に身を注ぐというようなイメージがあります。でもそれは違います。ひと区切りついたら、今度は別の分野にころんと移ることは全然珍しくない。大きく幾何、解析、代数と分けますけれども、便宜的なものにすぎないわけです。(円城塔「天才数学者は、変人とはかぎらない」)
- (18') 数学者は、生涯、ひとつの分野で定理の証明に身を注ぐというようなイメージがあります。でもそれは違います。ひと区切りついたら、今度は別の分野にころんと移ることは全然珍しくない。ということは、大きく幾何、解析、代数と分けますけれども、便宜的なものにすぎないわけです。
- (19) この六年ばかりのあいだ五年近くは日本を離れて外国に住んでいる。つまり外国語を使わなくては生きていけない状況に、自ら進んで身を置いているわけだ(村上春樹「やがて哀しき外国語」)。

ワケダ構文の構成的意味は以下のように考えられる。

[XハYワケデアル=XハYワケナリ (ニアリ)]

Xは「Yワケ」(原因理由)というカテゴリーに所属する(指定)ということから、XとYはそれぞれ原因理由と結果帰結を表し、ワケダ構文全体は帰結説明を表すことになる。

(cf. 指定用法の欠如)

cf. 西山 (2003)、西山編 (2013)

「～理由」などの名詞句を「変項名詞句」と見ている。この見方によれば、「～理由」と同類の「Y ワケ」という名詞句を取るワケダ構文は「X ガ Y ワケダ」という指定の構文とみなされることになろう。指定と見ることは理由の「値」の付与に焦点が置かれることを意味するが、ワケダ構文は必ずしも理由に焦点が置かれるわけではない。

#### 4. 2 ノダ構文とワケダ構文における因果性の性格

##### 4. 2. 1 両者構文の異同

因果性がかかわるという点を共有したうえで、両構文には次のような相違点が認められる。

###### ◇ノダ構文

因果性は派生的意味(卓越的な派生的意味)として成立する

###### ◇ワケダ構文

名詞「ワケ」の使用により因果性が構成的に表される (⇒通常のコピュラ構文)

##### 4. 2. 2 帰結説明における両構文の競合と共存

益岡 (1990 (1991))

ノダ構文・ワケダ構文に帰結説明の意味用法が認められるという点とあわせ、両者のあいだに主観的 vs. 客観的という対立があるという点を指摘した。

(20) 当時は国立大学を2度受験できた。(ということは、) 幸運な時代だった {のだ/?わけだ} と思う。

(21) 花子は毎日3時間の練習をする。したがって、1週間では、21時間も練習する {?のだ/わけだ}。

(22) 原子が発する光は、原子固有のスペクトルを示すことが知られている。したがって、スペクトルの測定を行えば原子の種類を識別できるわけだ ((?) のだ)。(小山慶太「若き物理学者たちのケンブリッジ」)

主観的 vs. 客観的という対立は、ここでは以下のように理解される。

###### ◇ワケダ構文

名詞「ワケ」の使用によりコト間の論理的な関係(道理)が表される

cf. コトニナル (トイウコトニナル)

(23) ?当時は国立大学を2度受験できた。(ということは、) 幸運な時代だったことになると思う。

(24) 花子は毎日3時間の練習をする。したがって、1週間では、21時間も練習することになる。

###### ◇ノダ構文

話し手の捉え方・解釈(推論に基づく話し手の認識)

(25) 「も、もちろんさ」何度も大きく、首を縦に振る。案外、可愛い部分、持っているん

だ、と摩耶は思う。(田中康夫「オン・ハッピーネス」)

## 5. 他言語の類似構文

日本語のノダ構文における因果性の意味の派生は理にかなった現象と見られるところから、他言語にノダ構文と同類の拡張コピュラ構文があれば、ノダ構文と同様の構成的意味・派生的意味が認められることが想定される。ここでは、特に派生的意味を問題にする。

### 韓国語と英語の場合

#### ◇韓国語 (cf. 崔 (2006))

日本語と同じ述語後置型言語

「ノダ」に類似する文末形式 ‘geosida’ の存在

事情説明・帰結説明の意味用法の存在

#### ◇英語 (cf. 大竹 (2009))

日本語とは異なる述語前置型言語

構文 (‘it is that~’) レベルでの類似性

事情説明・帰結説明の意味用法の存在

課題：派生的意味に関するタイポロジーの可能性

◇日本語・韓国語・英語→事情説明及び帰結説明

◇フランス語 (渡辺淳也氏私信) →事情説明中心

◇ネワール語 (松瀬育子氏私信) →帰結説明中心

### 関連する課題

「主題」(Topic)がどう関係するか？

主題の明示性

## 6. おわりに

日本語の拡張コピュラ構文(ノダ構文)における構成的意味と派生的意味のかかわりをめぐって以下の点を指摘した。

- (i) ノダ構文の構成的意味(代表的な構成的意味)は、コトXがコトYに“密接に関係する”という「近接性」(近接関係)の意味と見ることができる。
- (ii) 近接性の意味から因果性の意味が派生するため、事情説明(原因理由説明)・帰結説明の意味が構文レベルでの派生的意味(卓越的な派生的意味)として成立する。
- (iii) ノダ構文に認められる事情説明・帰結説明の意味が派生的意味であるのに対して、ワケダ構文に認められる帰結説明の意味は構成的意味と見ることができる。

さらに、他言語にも拡張コピュラ構文が存在するとすれば、ノダ構文と同様の構成的意味・派

生的意味が認められるのではないかという見方を提出した。日本語研究の内部に閉ざされがちであったノダ構文(拡張コピュラ構文)の研究を言語研究に拡げ、他言語を交えたより広い視野からの考察を試みる事が求められる。

#### 参考文献

- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店.
- 大竹芳夫 (2009) 『「の(だ)」に対応する英語の構文』くろしお出版.
- 大堀壽夫・遠藤智子 (2012) 「構文的意味とは何か」澤田治美編『ひつじ意味論講座第2巻：構文と意味』ひつじ書房.
- 奥田靖雄 (1990) 「説明(その1) —のだ、のである、のです—」言語学研究会編『ことばの科学4』むぎ書房.
- 木下りか (2013) 『認識的モダリティと推論』ひつじ書房.
- 田窪行則 (2006) 『日本語条件文とモダリティ』京都大学博士論文.
- 田野村忠温 (1990) 『「のだ」の意味と用法』和泉書院.
- 崔眞姫 (2006) 『「のだ」の文法化と機能別必須性』ソウル：図書出版チェックサラン.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房.
- 西山佑司編 (2013) 『名詞句の世界』ひつじ書房.
- 野田春美 (1997) 『「の(だ)」の機能』くろしお出版.
- 益岡隆志 (1990) 「説明の構造」科学研究費総合研究(A)『日本語の文脈依存性に関する理論的実証的研究』研究成果報告書(益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』(くろしお出版) に再録)
- 益岡隆志 (2003) 「名詞文としてのノダ文」『CLAVEL』1号、対照研究セミナー、神戸市外国語大学(益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探究』(くろしお出版) に再録)
- 益岡隆志 (2013) 『日本語構文意味論』くろしお出版.
- W. M. ヤコブセン (1990) 「条件文における「関連性」について」『日本語学』9巻4号.
- Sakahara, Shigeru (1996) “Roles and identificational copular sentences.” G. Fauconnier and E. Sweetser (eds.) *Spaces, Worlds, and Grammar*. Chicago: University of Chicago Press.
- Sweetser, Eve (1990) *From Etymology to Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.